

芸能文化の振興しんこうのために

白井松次郎、大谷竹次郎

【松次郎翁】朝倉文夫作



(松竹株式会社所蔵)

【竹次郎翁】朝倉文夫作



(松竹株式会社所蔵)

数々の銀幕スターや名作映画を生み出してきた「松竹映画」のことは、皆さんも聞いたことがあるでしょう。タレントや有名人の所属事務所として、「松竹芸能」を知っている人も多いかもしれません。また、日本には、四百年も前から続く歌舞伎かぶきという伝統的な舞台芸能があります。松竹が制作して興行していません。

松竹株式会社は、一八九五年（明治二十八年）十二月の創業以来、現在も、演劇や映画のみならず、様々なエンタテインメントの分野で幅広い事業を展開している日本の企業ですが、その創業者である白井松次郎・大谷

【銀幕スター】
映画スターのこと。

【松竹株式会社】

映像関連事業

・劇場用映画の制作、売買、配

給、興行。

演劇事業

不動産事業

その他の事業

松竹株式会社のグループ会社として、(株)マルチプレックスシアターズ、(株)衛星劇場、松竹芸能(株)など十九の会社がある。

【関連年表】

一八七七年 誕生

一八九五年

竹次郎、父の代理として、新京極・阪井座の金主となる。

一八九七年

松次郎、白井ヤエと結婚。婿養子

となり、白井姓を名乗る。

一九一〇年

松次郎が大坂、竹次郎が東京を担当する体制の確立。

一九二一年

松竹キネマ合名社を設立、蒲田撮影所を開設し、映画制作に参入。

一九五一年

白井松次郎死去。

一九六九年

大谷竹次郎死去。

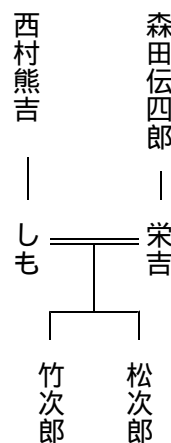
竹次郎兄弟は、実は、鹿児島にゆかりのある人物なのです。

一八七七年（明治十年）十二月十三日、京都三条の大谷家に、双子が誕生しました。二人の祖父にあたる森田伝四郎は、薩摩藩士の市来次郎左右衛門に仕えた森田の一族で、その長男栄吉は、大谷家に養子として迎えられていました。

大谷家は旅館を経営していましたが、明治維新の激動の最中に倒産し、双子が生まれる前の栄吉は、職を転々としていました。そんな折、花相撲を手伝うことになった栄吉は、水場の株を持っていた西村熊吉の二女のしもと知り合い結婚します。その二人の間に生まれたのが、双子の兄弟でした。

双子は、兄が松次郎、弟が竹次郎と名付けられます。

【人物関係図】



【花相撲】

本場所以外の相撲興行。

【水場の株】

花相撲などの相撲興行では、見物客に物を売ったり貸したりするビジネスが付き物で、これを「水場」と呼ばれる売店が担当した。売店といっても、売り場があるのではなく、場内を回りながら商品売って行くもので、誰がどの興行で水場を請け負うかの権利を「株」と呼んでいた。

二人の誕生日の十二月十三日は、京都の習慣で「事始め」といい、この日から正月並みに松飾りをする家もあり、寺子屋や稽古場などに弟子たちがお供え餅もちを持参する祝い日で、大変縁起のいい日でした。

二人が生まれてからも、栄吉としもの夫婦は、寝る間を惜しんで水場の仕事に励んでいましたが、決して裕福とは呼べない生活でした。そんな折、二人の母方の祖父である西村熊吉は、関わっていた劇場の売店経営を、娘夫婦（栄吉・しもの夫婦）に任せることにしたのです。

劇場の売店といっても今のようなものではなく、品物を持って芝居小屋の場内を売り歩く仕事でした。それも、季節や客の好みによって商品を変えなければならず、単純な作業ではありません。やがて小学生になった松次郎と竹次郎は、学校に行く日より店を手伝う日の方が多いくらいでしたが、父と母が立派な劇場で働くことを嬉しうれ

【劇場、座】
当時の「劇場」「や」座は、主に歌舞伎を興行する場のことを指す。

【氷水店】

かき氷を売る店。氷を細かく削るか砕いて、甘露水をかけて売っていた。

【甘露水】

砂糖に水を加えて煮詰めたもの、シロップのこと。

【祇園囃子】

祇園祭に伴う祭囃子の総称。

【阪井座】

京都では、四条大橋の南座と、その対面にあった北座が、歴史のある劇場にあたる。

明治になってからの繁華街である新京極にも、南から、阪井座、福井座、大黒座、夷谷座、常磐座の五つの劇場があり、南座や北座と比べると規模は小さいながらも、賑わっており、他にも寄席や見世物小屋が並んでいた。

く思った二人は、ただただ夢中で両親を手伝いました。

劇場が休みの時は、夏祭りに氷水店を出して商売をすることもありましたが、甘露水を煮てそれを冷ます時間もない忙しさで、皆にせき立てられながら、汗だくで働きました。熱い甘露水の瓶を肩にして店へ運ぶ途中、汗で手が滑り、全身に甘露水を浴びたこともありました。

祇園囃子の音を先頭に、祭りの一団が街を練ってくる
と、それが見たくてたまらなくなりましたが、二人は両親に甘えることはせず、仕事の手伝いを続けました。

一八九五年（明治二十八年）のことです。

「竹次郎、わたしの代わりに阪井座の仕事場に座ってんか。来月から阪井座のことは、すべてお前に任せるよ。いいな。」

父の言ったこの言葉に、十八才だった竹次郎は、驚き

【若い二人が観た舞台】

二人は、劇場で物売りながらも、中村鴈治郎、市川團十郎などの当時の名優達の演技に魅せられていった。



【考えてみよう】

二人の姿から、あなたは何を学べるだろうか。

のあまり棒立ちになってしまいました。

この頃、兄の松次郎は既に白井亀吉のところ働きに出ており、父親である栄吉としては、残る弟の竹次郎のことが心配だったのでしよう。それで自分が阪井座の**金主**になると同時に、その仕事を全て竹次郎に任せ、自分はこれまで通り本業の売店で働いたのです。なお、現在の松竹株式会社は、この年を創業の年としています。

やがて、竹次郎は二十三才で、**金主**をしていた阪井座を借金の末に買収し、改めて**座主**として独立することができました。

芝居小屋に手を入れて俳優の絵看板も掲げ、稽古も無事に済ませ、いよいよ明日開場という日のことです。突然警察から興行中止の命令が出されました。理由は、建物が老朽化して危険であるということ。警察に出向いて、

【白井亀吉】

本業の寿司屋以外に、夷谷座の売店全部の権利を握っていた人物。この後、松次郎は白井家の婿養子に選ばれ、名を白井松次郎と改めた。

【金主】

歌舞伎興行のスポンサー。興行面に大きく干渉し、座内では座主に次ぐ権限を有していた。

【座主】

劇場の持主。

初日だけでも興行を認めてもらいたいとお願いしましたが、認めてはもらえませんでした。このとき竹次郎は、「このままでは引き下がれない。命をかけてもこの劇場以上のものを建てて、今まで以上の芝居興行をやらなければ。」

と強く決意します。

兄の松次郎も同じ頃、京極座や夷谷座えびすなどの劇場の経営権を手に入れて、芝居興行に力を入れ始めていました。演劇に対する理想や情熱は、松次郎も同じだったのです。

二人の事業がやや軌道きどうに乗りはじめた頃、経営困難に陥おちいった常盤座とぎわの再建話が二人に舞い込み、二人は、ある条件を付けてこれを引き受けました。実は、その頃の日本の劇場には、悪い習慣が残っていたのです。

当時の劇場の木戸口には、客を脅おどしたりからかった

【歌舞伎を鑑賞してみよう】

あなたは、どんな歌舞伎の演目を知っているだろうか。歌舞伎を見てみよう。

【興行の仕組み】
芝居小屋で興行するには、関係の役所の許可を得る必要があった。

【木戸口】
劇場の出入口。



りする連中がたむろしていました。それを防ぐには、彼らの「親分」に頼まなければならず、親分は見返りに、
棧敷席さじきの何割とか立見席全部などの、木戸銭を要求するのです。また、番附ばんづけや火鉢、布団などを貸し出す
商売の権利者がいて、彼らは劇場に一円も場所代を払い
ません。いくら客が入っても劇場は収入を横取りされる
だけで、利益が出ない仕組みになっていました。

二人は、これらの人々を排除したいと考えており、それを条件に常盤座の再建に取り組むことにしました。とは言え、契約上はそうなったものの、二人が常盤座に乗り込んで、彼らは全く動こうとしません。刀で斬られそうになったこともありましたが、二人は怯ひるみませんでした。

さらに、入場料も切符制きっぷにして、案内係への祝儀しゅぎなどの慣行かんこうも全廃ぜんぱいしました。また、当時は開幕や幕間の時

【木戸銭】
入場料・観覧料。

【番附ばんづけ】
筋書き（プログラム）のこと。

【祝儀】
現在のチップ。

【観客本意の改革】

松次郎・竹次郎は役者たちにも厳しく、台詞を忘れることを許さず、プロンプター（役者が台詞を忘れた時、小声で教える人）も付けさせなかった。また、作品は必ず自分で観てチェックしてから上演するということを怠らなかった。

【母の羨】

二人の母しもは、「兄は弟に負けるな。弟は、兄に勝て。」と教え、大きくなってからは、「兄弟間の争いを世間に知らすな。」と堅く命じていた。二人は、その教えを守り通した仲の良い兄弟だった。

間が一定ではなく、役者の準備が出来しだい幕が開くようになっており、役者たちが客と話をしたりして、いつまでも幕が開かないこともありました。二人はそんな悪弊も絶って、定刻に幕を開けるようにしたのです。

これらの苦勞を乗り越えて、松竹兄弟による演劇興行の近代化の第一歩と、観客本位の改革が進められていきました。この取組は、日本で演劇という芸能を発展させ、誰からも愛される娯楽にするために、必要不可欠なものだったのです。

やがて兄弟は、関西興行界をリードする存在となっていくきます。その後、大阪を松次郎に任せた竹次郎は、東京へ進出し、東京・歌舞伎座などの多くの劇場を獲得しました。

また、二人は歌舞伎の他にも、文楽（人形浄瑠璃）

【東京・歌舞伎座】

一八八九年（明治二十二年）、東京の銀座に開場した歌舞伎専用の劇場。

数度の焼失、改築等を繰り返した後、第四期の建物が一九五〇年（昭和二十五年）十二月に竣工。以来多くの人々に親しまれてきたが、二〇一〇年（平成二十二年）に一旦、閉場。

第五期の新しい歌舞伎座は、二〇一三年（平成二十五年）竣工予定。

【文楽】

三味線の伴奏などにあわせて演じられる人形芝居（人形劇）。

本来、文楽とは、人形浄瑠璃の専門の劇場を指すが、現在は人形浄瑠璃自体の代名詞ともなっている。



【白井松次郎（右）と大谷竹次郎（左）】

【ソビエト】
旧ソビエト連邦れんぽう（一九九一年（平成三年）に崩壊ほうかい）。

【考えてみよう】

松竹兄弟は、どのような思いで、海外での歌舞伎公演を行ったのだろうか。

などの歌舞伎以外の演劇の振興にも力を注ぐとともに、

「松竹キネマ合名社」を創設して、新しい映画産業の開拓にも乗り出しました。その後は映画を会社の事業の中心にしながらか会社を拡大させていき、さらには、アメリカやソビエトへの初の海外歌舞伎公演も行い、日本の古典芸術を海外でも有名にしようと力を尽くしました。

白井松次郎は、戦後間もない一九五一年（昭和二十六年）一月、七十三歳で亡くなりましたが、大谷竹次郎は「白井と二人分働く。仕事が唯一の健康法。」と、兄の死を乗り越えて芸能振興の陣頭に立ち続けました。

竹次郎は、鹿児島島の森田家の墓参りに来た時、

「南洲なんしゅうと歌舞伎が精神的な支えだ。」

と述べていたそうですが、皆みなに愛される娯楽の提供に生涯をかけた松次郎と竹次郎の高い理想と信念、そして情

【南洲】
西郷隆盛のこと。

熱は、遠く鹿児島に由来ゆらいするものだったのかもしれない。
